

◆ 平成 28 年度 活 動 報 告 シ ー ト ◆

団体名：行幸湖浮きウキフェスタ実行委員会

19A-49

代表者：委員長 田中 忠

URL :

1. 活動が必要とされた状況

行幸湖（みゆきこ）は、利根川と中川を結ぶ調節池（＝平地ダム湖）で、中川の洪水抑制（夏期）と工業用水と水道水の取水（冬期）に利用されている。夏期には水位の低さ（4m）と流量の少なさから、水質が悪化しアオコが大量に発生する。また、5km にわたる両堤防は、コンクリートブロックで護岸され、さらに夏冬の水位差が 7m もあり、岸边にも水面にも植生にとぼしく、57ha（東京ドーム 12 個分）のダム全体が貧弱な生態系になっている。そこに水質改善機能を持つ「ビオトープ浮島」を設置して水質改善と生物多様性空間づくりを行う。

2. 活動の内容（実施時期、参加人数、活動内容など）

「ビオトープ浮島」（以下浮島）の組立・設置：

浮島は、間伐材と竹を組み合わせたイカダに、木炭とアシの根を入れた袋を積み、水面に浮かしたものだ。アシの成長と共にアシの根による水質改善作用と、茂ったアシによる「島」は、鳥や魚などの休憩場・隠れ場となり、新たな生物多様性空間を出現させる。

10月30日、市民団体・近隣企業・地元行政で構成される実行委員会（21団体）が水辺再生イベント「浮きウキフェスタ 28」を実施。その一環として浮島を作り、湖面に設置した。

浮島づくりには、小学生以下の子供 21 名を含む計 87 名が参加、4 班に分かれ 4 基の浮島をつくった。組み立てられた浮島は、竹のレールを使い湖面に投入（進水式）、ボートにより湖の中央に係留され固定された。



3. 活動の成果

今回設置された浮島は、アシの生える 1 年後以降でないと、水質改善、生物多様性空間づくりの効果は出ないが、平成 21 年にフェスタ開催以来、毎年設置された浮島の数はすでに 64 基あり、こうした既存の浮島と連動した効果の増加が期待される。

浮島づくりへ参加した子供たちには、水環境の大切さや浮島のもつ役割など、浮島組立を通じて伝えることができた。

4. 今後に残された課題

広大な水面をもつ行幸湖のアオコ発生に対して、この数の浮島の水質浄化作用では決定的な効果は期待できない。しかし、生物多様性空間は着実に増え、その成果を見ることができる。アオコの問題にどう対処するか、今後の課題である。

